

ベンジャミン・ブリテンの『戦争レクイエム』

—「楽曲」と「演奏」—

小林 敬子

日本大学大学院総合社会情報研究科

Benjamin Britten's *War Requiem*

—Text and Performance—

KOBAYASHI Keiko

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

British composer Benjamin Britten (1913-1976) created many important works of music, and among them, *War Requiem* (1962) is probably the most significant as both text and performance. Britten alternates poems of Wilfred Owen (1893-1918), the WWI soldier and anti-war poet, with the Latin words of the Requiem Mass, criticizing its conventions, and thus highlighting the tragedies of war rather than merely mourning the dead and comforting the living. The work was commissioned to celebrate the rebuilding of Coventry Cathedral, which was destroyed by Nazi Germany in World War II. In opposition to the intention of the commission to celebrate the war victory and Christian faith, Britten dedicated the work to his friends who had died in the war, criticizing both the war and conventional religious consolation. Inviting singers from the former enemy countries and performing a work critical of Christianity in the cathedral were considered extremely unconventional. Since then, however, *War Requiem* has been performed on various occasions to commemorate the war and the dead.

In this thesis, I will examine how Britten developed his principled opposition to war and violence, and then I would like to examine the text of *War Requiem* as well as several important performances, considering the meaning of the work, relevant to all of us now, as a principled act of opposition to war and violence.

1. はじめに

イギリスの作曲家ベンジャミン・ブリテン (Benjamin Britten 1913-1976) は、来年 2013 年に生誕 100 周年を迎える。20 世紀に世界では二度の大戦、及び地域の紛争があり、人々の悲しみは絶えることがなかった。21 世紀に入っても、テロに発した戦争、領土紛争、中東の国々の内戦を含む不安定な状態が続き、冷戦が終結してから 20 年以上経つが、世界は少しも平和な状態に向かわない。今、ブリテンを考察することにどのような意味があるのでしょうか。

20 世紀前半、ブリテンが作曲家として認められてきた頃、英仏とドイツの間で戦争が始まり、第二次

大戦へと拡大する。ブリテンの『戦争レクイエム』 (War Requiem) は戦争の悲惨を奏し、これを告発する。『戦争レクイエム』は、従来の、教会における死者のためのミサ曲を、ただ踏襲したものではない。古くからのラテン語の定型詩と反戦詩人ウィルフレッド・オウエン (Wilfred Owen 1893-1918) の詩を交互に配置し、曲をつけたものである。オウエンは第一次世界大戦の終結一週間前に戦死した。彼は戦争の悲劇、特に兵士の苦悩を生々しく詩に書いた。ブリテンはオウエンの反戦詩とラテン語の詩を対話させることにより、戦争の悲惨をより明確に描くことに成功している。

1962年に初演され今年2012年で50年となる。5月30日、コヴェントリーの聖マイケル大聖堂では、初演50周年を記念した演奏会が開かれた。この半世紀、コヴェントリーを始め、ロンドン、ベルリン、広島、東京他、様々な場所で演奏され、反戦メッセージを伝えてきている。

本稿では、まず、ベンジャミン・ブリテンが時代と関わって、非暴力・反戦主義者となっていた経緯を明らかにする。その上で、『戦争レクイエム』が社会的暴力への抗議として書かれたものであることを確認する。オウエンの詩とミサ定型詩がどのように交わっているか、テキストとしての楽曲の分析を行い、ブリテンの反戦の意図が演奏において、どのように表出され、どのように人々に受け止められたかを考える。戦争には勝者や敗者はなく、それに関わったすべての人々が不幸であり、それを認識することが、死者の魂を慰めることになるのだというブリテンの考えを明らかにしたい。今日、この曲が繰り返し演奏されるのは、この曲の意味を改めて我々自身に問いかける為なのである。

2. 反戦主義者としてのブリテン

ブリテンは反戦主義者として知られているが、その源はどこにあるのか、ハンフリー・カーペンター（Humphrey Carpenter）の *Benjamin Britten: A Biography* をもとに考えていく。ブリテンはイギリス、ローストフトに生まれた。幼少時より作曲を試み、ピアノ、ヴィオラのレッスンも受けた。8歳でサウス・ロッジ・プレパラトリー・スクール（South Lodge Preparatory School）に入学した。彼はこの学校で少年たちが教師による性的虐待・身体的虐待を受けていることを知り、衝撃を受けた。それは受け入れるべきものであるとの認識が生徒間に広まっていたからである。強者による弱者への暴力的支配に対しての嫌悪感が、この頃より始まった。

1933年に父が死去し、自活するために詩人 W. H. オーデン（Wystan Hugh Auden 1907-1973）に協力し、記録映画を作った。英詩についてオーデンから啓発され、彼の詩に作曲することも始めた。オーデンはブリテンより7歳年上で、プレパラトリー・スクールで教えていたが、既に左翼の詩人として知られて

いた。オーデンの人柄と詩に流れる反戦思想にブリテンは影響を受ける。オーデンの詩にある反権威主義は、当時、台頭し始めたナチスへの嫌悪感を呼び起こすことになった。

1936年に始まったスペイン市民戦争は多くの文化人を巻き込んだ。オーデンはこの戦争に参加する旨、ブリテンに伝えたが、ブリテンはそれを引き止めた。1937年には中国侵略を進めていた日本や、スペイン内戦でフランコ将軍を支援していたイタリア、東方への侵略計画をすすめていたドイツに対して、英国は寛大な政策をとっていたが、1938年にドイツがプラハを占領した時点で、宥和政策による平和確保は幻想であることがはっきりした。ドイツは独ソ不可侵条約を結んだのち、ポーランドに侵攻した。

ドイツとの戦争の色が濃厚になる1939年4月、この戦争を避けるためにイギリスをあとにすることを決め、友人のピーター・ピアーズ（Peter Pears 1910-1986）と共にサザンプトンからケベックに向けて出発した。ピアーズとは同性愛の関係にあり、生涯を共にしている。当時、同性愛は罪であり、彼は社会からの疎外を感じていた。戦争へと傾倒していく国家に対して、同性愛者であるブリテンとピアーズは、社会的には既に一度主流から降りていたとも言える。英仏は1939年9月3日にドイツに宣戦布告を行なう。

ニューヨークに渡ったブリテンは、その地に在住の芸術家たちと交流を始めるが、イギリス本国からは、軍人、一般の人々のみならず、音楽家からもかなりの非難を浴びている。友人たちからの帰国しないようにとの忠告に従ったが、次第に生活費に困るようになる。そうした折、知人の出版業者ラルフ・ホークス（Ralph Hawkes 1898-1950）から、日本政府が、日本の皇紀2600年奉祝曲を各国作曲家に依頼しているという話を聞き、その委嘱を受けた。この時期、日本は中国へ侵攻しつつも、まだ第二次大戦に参加はしていなかった。ブリテンは『シンフォニア・ダ・レクイエム』を委嘱作品として書いたが、日本政府からは「神武天皇ノ神靈ヲ讃フル奏祝楽曲ノ内容ヲ有セザル節」との理由で演奏を拒否された。これについて、ブリテンは1941年の『ニューヨーク・サン』のインタビューで、次のように説明している。

I'm making it just as anti-war as possible...I don't believe you can express social or political or economic theories in music, but by coupling new music with well known musical phrases, I think it's possible to get over certain ideas. I'm dedicating the symphony to the memory of my parents, and, since it is a kind of requiem, I'm quoting from the Dies Irae of the requiem mass. One's apt to get muddled discussing such things -all I'm sure of is my own anti-war conviction as I write it. (Carpenter 146)

1940 年頃には、反戦主義者として生きることを既に自覚していたのである。『シンフォニア・ダ・レクイエム』は、両親の死を悼んで書いたものではあるが、結果的に、日本軍国主義を批判したものとなった。この作品は『戦争レクイエム』を予告したものと思われる。

その後、しばらくアメリカ滞在を続けたが、帰郷の念から、1942 年にはピアーズとともにイギリスに帰った。彼の渡米は、良心的兵役拒否と認められた。

1945 年、広島に原爆が投下されたときには、ロナルド・ダンカン (Ronald Duncun 1914-1982 詩人、脚本家、作家) とともに、オラトリオ『わが過失』を書いている。ダンカンは、この野蛮な行為への抗議として、ブリテンに作曲を促したのである。ブリテンは日本軍国主義を批判する一方で、日本の原爆の災禍と原爆投下の道義的責任をも音楽としたのである。

同年、オペラ『ピーター・グライムス』がロンドンで初演された。この作品も冤罪や虐待、そして強者と弱者の関係を内容とし、ブリテンの社会的弱者に対する思いが込められている。ブリテンはその後、オールドバラに永住することを決め、戦後 1948 年にオールドバラ音楽祭を創設した。ピアーズの「友人たちによって演奏される、あまり規模の大きくない自分たちのフェスティバルをここでしたらどうだろうか。」との言葉に触発されたものだ。一方で、ピアーズとの同棲に、村民から奇異の目で見られることもあり、ここでも疎外を感じていた。

1948 年のガンジーの死には大きな衝撃を受け、で

きればレクイエムのような形式で曲を書きたいとラルフ・ホークスに告げている。そして、1962 年、反戦の意図を込めて書いた『戦争レクイエム』は戦後最高の反戦の楽曲として世界中で演奏されている。

3. 反戦メッセージとしての『戦争レクイエム』

コヴェントリー芸術協会 (Coventry Arts Committee) は、1958 年 10 月、コヴェントリーの聖マイケル大聖堂の献堂式で演奏する曲の作曲をブリテンに依頼した。その結果、できあがったのが『戦争レクイエム』であり、1962 年 5 月 30 日に初演となった。

1940 年、ドイツ軍のコヴェントリー空爆によって、500 年の歴史を持つ聖マイケル大聖堂は破壊された。しかし、爆撃の翌日、再建が決定されている。再建は挑戦ではなく、信念と信頼、未来への希望を意図するものであり、苦難、憎しみを人々から取り去りたかったと当時の主任司祭のディック・ハワード (Dick Howard) は述べている。

大聖堂の再建は、建築家ベイジル・スペンス (Sir Basil Spence 1907-1976) に託された。ドイツ軍に破壊された古い聖堂の残骸を残しながら、現代的な教会に合体させたものである。ブリテン自身にとってこの曲は、友人 4 人を個人的に追悼する曲として書き始められた。出版されたスコアには、以下のよう

In loving memory of
Roger Burney, Sub-Lieutenant Royal Naval Volunteer Reserve
Piers Dunkerley, Captain Royal Marines
David Gill, Ordinary Seaman Royal Navy
Michael Halliday, Lieutenant Royal New Zealand Volunteer Reserve

(Carpenter 406)

ロジャー・バーニーはピアーズの友達であったが、フランスの潜水艦に乗船中、撃沈された。ピアーズ・ダンカーリーはノルマンディー作戦で負傷したが、1959 年の夏に自殺した。デビッド・ギルは、古い知

り合いであったが、地中海での戦闘で亡くなった。マイケル・ハリディは学友であったが、従軍中、行方不明になった。友人達の死は彼に深い悲しみをもたらした、この曲を書くきっかけとなった。

ブリテンはこのオファーを受けたときから、戦争に参加した国々の声楽家によるソロを入れること、ラテン語の詩文も入れることという計画を持っていた。1961年10月にはベイジル・コールマン（Basil Coleman 1930-2011）に「今、コヴェントリーの作品を書いているが、最高か、もしくは最低のものかもしれない。しかし、常に自分と一緒にいる」と告げている。曲の構成は、伝統的なラテン語の礼拝文とオウエンの詩を対比・対立させている。ラテン語の礼拝文は、死者の魂を慰めるために書かれた言葉であるが、そこにオウエンの詩が激しく突き刺さっていく。最後の「奇妙な出会い」ではやっと両方が溶け合うがそれまでの対立はすさまじい。従来のキリスト教の無力を糾弾している。

初演の反応は良かった。ウィリアム・マン（William Mann 1924-1989）は初演五日前に楽譜を見て、この曲はブリテンの傑作であると書き、初演後の批評では、「ブリテンが今までに我々に与えてくれた最高傑作である」と書いている。脚本家のピーター・シェイファー（Sir Peter Shaffer 1926-）は、『タイム&タイド』に、「感動し、批評することも厚かましい」と書いている。

ブリテンはスコアの内表紙にオウエンの詩を掲載し、自らにとっても戦争と戦争の悲惨が曲のテーマであり、作曲の動機であるとしている。

“My subject is War, and the pity of War.
The Poetry is in the pity...
All a poet can do today is warn.”

ジャスティン・タケットによると、歴史家のジェイムス・ハーバートは、「スペンスの意図がドイツ軍の残酷な爆撃の証拠を残すことにある」と考え、また、「破壊をそのままにすることによって罪深いドイツの攻撃の記念物としている」と述べている。コヴェントリー芸術協会は、英国の復興・連合国の勝利を示すものととらえた。しかし、こうした考えに対

してブリテンは異議を唱えた。勝利者としてのイギリスを祝うのではなく、被害者は加害者にもなり、戦争はあらゆる人々にとってただ、悲惨な結果をもたらすことを示した。お互いに痛みを分かち合うことで人々に平和がもたらされることを示唆した。そして、聴衆がそのことを感じ取ったからこそ、この曲は胸を打つものとなったのである。

4.『戦争レクイエム』各曲を考察する

この作品は6部構成となっている。

- 第1章 レクイエム・エテルナム Requiem aeternam
- 第2章 ディエス・イレ Dies Irae
- 第3章 オフェルトリウム Offertorium
- 第4章 サンクトゥス Sanctus
- 第5章 アニュス・デイ Agnus Dei
- 第6章 リベラ・メ Libera me

第1章 レクイエム・エテルナム

4分の4拍子

ゆっくりと厳粛にと指示がある。第1章は、大きく二つに分けられる。ラテン語の典礼文と、オウエンの詩の英語の部分である。ラテン語の典礼文は、コーラスによって掛け合いで歌われる。オウエンの詩は、戦争の残虐さと兵士の悲しみを歌っているが、ブリテンはテノールのソロ、バリトンのソロで表す。

まず、重く響き渡るゴングとともに、弱く、ユニゾンで cis → d と始まる。鎮魂の鐘が絶え間なく鳴らされる。ソプラノとテノールが低く、ファ♯=fisの音で“Requiem aeternam”とつぶやく。再び“Requiem aeternam”とバスとアルトがつぶやくが、これはド=cで出てくる。これはソプラノとテノールに対して、増4度である。3度目に出てくる“Requiem aeternam”では、ソプラノとテノール、アルトとバスで、同じ音程で掛け合いをする。弦楽器がユニゾンで増音程、減音程を含む不安定な動きを続ける中、鐘は執拗に鳴っている。「レクイエム」永遠の休息を…と語りかけているにも関わらず、音自体はそれを裏切っている。歌詞に即しているのであれば、本来、平穏であるべき音が、不安を誘い、言葉と音が全く一致していない。これは勿論ブリテンが意識的にしていることである。タケットの論文

にあるとおり、アイロニーである。弦楽器がユニゾンで緊張を持って上昇を続けるが、急にソプラノ、アルト、テノール、バスとたたみかけるように“et lux perpetua, luce at eis 絶えざる光を彼等の上に照らしたまえ”とフォルテで重なり合う。ここの音程も c fis c fis と上から重なりながら下がってくるが、この減5度の音程は増4度の裏返しである。ブリテンはこの音程にこだわっている。増音程、減音程は不安定であり、人々に不安感、焦燥感をもたらし、悲劇を予測させる。コーラスは“Requiem aeternam”とつぶやきつつ、ごく弱く終わる。拍子と速度が変わり、少年たちとオルガンがユニゾンで“tedecet hymnus, Deus in Sion, 神よ、主の讃美をふさわしく歌えるのはシオンにおいてである”と速い速度で歌いだす。複雑な音程だが、少年の声を使い、透明感がある。速度の変化も大きい、拍子の変化が激しく、4分の6拍子、4分の3拍子、4分の4拍子が1小節ごとにめまぐるしく変わる。“Exaudi orationem meam 主よ、我らの祈りを聞きたまえ”からは、4分の5拍子、2分の3拍子が入れ替わり、2分の3拍子が4分の6拍子に置き換えられて、だんだんと弱くなり、消え入るようになり落ちていく。この部分も c, fis での掛け合い、重なり合いである。再び鐘が鳴り始め、ゆっくりと“Requiem aeternam”とコーラスが唱え始める。

最初の弦の動きが再現され、盛り上がったのち、再び pp で終わる。しかし一瞬の空白ののち、ハーブの素早い分散和音に乗って、テノールが“What passing bells for these who die as cattle? 家畜のように死んだ人々を弔う鐘なのか…”と、歌い始める。何のための鐘なのか…と怒りを込めて抗議している。ここで使われている詩は、「戦死の宿命にある若者たちへの聖歌」である。“What candles may be held to speed them all? 彼等にさよならを言うためにどんなロウソクを立てればよいのか”と緊張が続いた後、前出した少年のコーラスと同じメロディーでオーボエ、クラリネット、テノールのソロが歌い継がれ、最後に向かう。テノールの怒りは、あきらめへと変わり、“and each slow dusk a drawing down of blinds そして毎日のゆるやかに暮れゆく夕闇を引きおろす日覆いとせよ”とつぶやきながら終わる。最

後には f c f a. ファラドの音程に変わり、解決して、ごく弱く消え入るようになり終わる。若者に死が訪れたのである。

第2章 ディエス・イレ

4分の4拍子

初めのトランペットやホルンのファンファーレは、「怒りの日」のラッパであるとともに、現実の戦争の突撃のトランペットでもある。ベルリオーズ、ヴェルディ、フォーレの各レクイエムにおいても、神の怒りのラッパの響きはあるが、ブリテンの響きは軍隊そのものである。

グレゴリオ聖歌の「怒りの日」は、有名な曲で、f e f d e c d d ファミファレミドレレと始まる。この『戦争レクイエム』も初めの部分は、使われている音は大体同じ組み合わせで、d e f e g f e d レミファミソファミレと始まる。その後にもまたしても突撃ラッパが響く。“tuba mirum spargens sonum per sepulchral regionum coet omnes ante thronum 不思議なる響きのラッパが、この世の墓の上に鳴り渡り、ものみなを玉座の前に集めん”と礼拝文は語るが、誰も蘇りはしない。ただ、傷つき死んでいくだけである。だからこそ、バリトンが bugles sang と歌い始める部分が意味を持つ。川岸で死の淵にいる少年たちをなぐさめるラッパの響きでもある。

曲は静まり、“liber scriptus”へと続く。「すべてのことを書き記されしものが、この世を裁くために持ち出されん」とソプラノが歌う。次の“Quid sum miser tunc dicturus?” テノール、ソプラノと重なり合うところの後ろでは、ティンパニが静かにリズムを刻む。この動きは仏教の木魚の響きを思い起こさせる。

第1曲目の冒頭部分にも鎮魂の鐘になる。ブリテンは、日本に2週間ではあるが滞在したこともあり、仏教の読経を耳にしたこともあるのではないかな。

ソプラノの後ろで“Salva me, fons pietatis 我をも救いたまえ、憐れみの泉よ”とコーラスが静かに歌うが、これは死者のつぶやきである。バリトンとテノールが掛け合いながら“we’ve sniffed the green thick odour of his breath われわれは死の息の緑の濃い臭いをかいできた”と歌われた後、静かに“recordare”と女性合唱が入る。この部分は透明で美しい。「思い出したまえ 慈悲深きイエズスよ」と歌われるこの

部分は何の「レクイエム」においてもラクリモサと並んで特に美しい部分である。

再びディエス・イレが登場したのち、テノール・ソロで“move him into the sun 太陽のもとに彼を動かせ”と語る。「むなしさ」(Futility) という詩であるが、敵地で亡くなったばかりの若い兵士の遺体を前にして歌われている。この語りは感動的である。オウエンの詩はどれも素晴らしいが、この「むなしさ」は特に心を打つ。最後は合唱で静かに“Pie Jesu Domine,dona eis requiem 慈悲深きイエズスよ 彼らに平安を与えたまえ”と終わる。最後の和音は第一章と同じく *fa c* ファラドで終わる。この部分にも静かに鎮魂の鐘の音が聞こえてくる。この曲には、1 曲目に見られる特徴的な音程はない。

第3章 オフェルトリウム

変則拍子

オルガンに乗り、少年たちが、主よと呼びかけ続ける。しかし“Quam olim Abrahæ promisisti, 主がその昔アブラムに約束した…”から動きが激しくなる。バリトンが、“so Abram rose, and clave the wood 主の命にしたがってアブラムは起き上がり、たきぎを割りにでかけていった”と語り始めるが、イサクの“My Father, where the lamb for this burnt-offering? お父さん、犠牲の羊はどこに?”とか細くつぶやく声にもアブラムは躊躇しない。背景には軍隊ラッパも聞こえる。

突如、ハープの響きとともに、天使の声が、アブラムに行為の中止を命じるが、ここでもアブラムは天の声を無視し、わが子を殺す。ここでの天使の声は、バリトンとテノールの二重唱である。少年たちの祈りにも関わらず、アブラムは全く動じない。天使が、“hostias et preces tibi Dominus Deus Sabaoth 主よ、称賛の犠牲と祈りとわれらは主にささげ奉る”と呼びかけるが、称賛の犠牲ではなく、無駄な死であり、天使の言葉は何の意味もなさない。ここに参考として、この場面の原詩とその訳を示す。

少年のコーラス

Domine Jesu Christe, Rex gloriae,
栄光の主、主イエス・キリストよ。
Libera animas kmnium fidelium
死んだ信者すべての靈魂を

Defunctorum de poenis inferni, et de profundo lacu:

地獄の罰と底しれない深淵とから救い出し、

Libera eas de ore leonis, ne absorbeat eas tartarus,

それらを獅子の口から解き放ちたまえ。

ne cadant in obscurum

かれらを冥府に落とさず、やみに投げたもうことなかれ

Sed signifer Sanctus Michael

repraesentet eas in lucem sanctam :

しかし旗手聖ミカエル 主よ

称賛の祈りとわれらは主に捧げ奉る。

Quam olim Abrahæ promisisti,et semini ejus.

主がその昔アブラムとその子孫らに約束したもうたその生命へ。

バリトン及びテノール・ソロ

So Abram rose, and clave the wood, and went,

主の命に従い、アブラムは起き上がり、たきぎを割り、出かけて行った。

And took the fire with him, and a knife.

火とナイフをたずさえて。

And as they sojourned both of them together,

そして二人が一緒に立ちどまった時、

Isaac the first-born spake and said,

長男のイサクはアブラムに話しかけて言った、

My Father ,Behold the preparations, fire and iron,

「お父さん、火と鉄具の準備がととのいましたが、

But where the lamb for this burnt-offering?

丸焼きにする犠牲の山羊はどこにいるのですか。」

Then Abram bound the youth with belts and straps,

すると、アブラムは息子を帯と皮ひもで縛り、

And builded parapets and trenches there,

そこに柵をたて、溝を掘り、

And stretched forth the knife to slay his son.

わが子を殺そうと ナイフを突き出した。

When lo! And angel called him out of heaven,

とその時、見よ、天より天使が彼に呼びかけ言った、

Saying, Lay not thy hand upon the lad,

「その若者らおまえの手を下してはいけない、

Neither do anything to him, Behold,

また その子に何もしてはならない。

A ram, caught in a thicket by its horns;

見よ、角を藪にひっかけて一頭の雄羊が見えるだろう、

Offer the Ram of Pride instead of him.

息子の代わりに高慢の雄羊を神に捧げよ。」

But the old man would not so, but slew his son,-

しかし老人はそうはせず、わが子を殺し、

And half the seed of Europe, one by one.

かくして ヨーロッパの種の半分を、ひとつずつ絶やしたのだった。

「老人と若者の寓話」

(The Parable of the Old man and the Young)

少年のコーラス

Hostias et preces tibi Dominus Deus Sabaoth

主よ、称賛の犠牲と祈りとわれらは、

tu suscipe pro animabus illis,

主に捧げ奉る

quarum hodie memoriam facimus:

今日記念する霊魂のためにこれを受け入れたまえ
face as, Domine, de morte transire ad vitam.

主よ、かれらを死から生命へと移したまえ。

第4章 サンクトゥス

変則拍子

グロッケンシュピール、シンバル、ヴィヴラフォーンのクレッシェンドで始まり、ソプラノが“sanctus” 聖なるかな”と始まる。仏教的な響きの鐘が鳴り、“sanctus”と力強く3回唱える。その後“pleni sunt caeli et terra gloria tua 主の栄光は天地に満つ”をバス、テノール、アルト、ソプラノと積み重なり、23小節かけてクレッシェンドしていくが、不安が満ちている。しかし、登りきった頂上で、輝かしいトランペットを中心としたファンファーレとともに“hosanna in excelsis”天のいと高きところにホザンナ（主を誉めたたえよ）が合唱で繰り返される。39小節繰り返されるが33小節目から静まって行き、“benedictus ベネディクトゥス”とソプラノが静かに澄んだメロディーを歌い始める。合唱がソプ

ラノに追隨して「ベネディクトゥス」を唱える。同じメロディーを合唱と弦楽器、フルート、クラリネットが完全8度、完全5度で追う。この音程には違和感がつきものだが、密やかに演奏されるため、それほど聴きづらくはない。ラテン語の聖句の部分は、各曲において、オーケストラも同じメロディーをユニゾンで奏する場合が多くみられるが、聖句を唱えるということに主眼を置いているからであろう。

始めのファンファーレに戻り、主の栄光をたたえる、ホザンナ（主を誉めたたえよ）で終わる。ただ、ここに続くオウエンの詩は、“all death will He annul, all tears assuage?すべての死を取り消し、すべての涙を鎮めてくれるのだろうか”と、まるで自問自答するようである。ベネディクトゥスが輝かしく終わったあとだけに虚しさと落胆が際立つ。

第5章 アニュス・デイ

16分の5拍子

Fis,e,d, cis,h,c,d,e,f,g（ファ# ミ レ ド# シ ド レ ミ ファ ソ）と下降、上昇のうねりが17小節、弦楽器がユニゾンでごく弱めにゆっくりと動き続け、テノールが静かに歌い始める。“One ever hangs where shelled roads apart. In this war He too lost a limb, 弾丸を撃ち込まれた十字路で、人はいつもためらいながら立ち止まる。この戦争では「主イエス」もまた片足を失いたもうた”。悲しみに満ちた歌である。主の使徒たちは逃亡し、兵士たちがイエスとともにいると歌っている。

続いてごく弱く“Agnus Dei, qui tollis peccata mundi, dona eis requiem 神の子羊、世の罪を除きたもう主よ、彼らに休息を与えたまえ”とユニゾンでつぶやく。弦楽器のユニゾンと合唱のユニゾンが交代に102小節目まで続く。102小節目の最後に変化が起こる。弦楽器のユニゾンはfisから同じ形を繰り返す。ブリテンはここで強く抗議している。

“the scribes on all the people shove, and bawl allegiance to the state 法学者たちはすべての国民たちに口やかましく言い、国家に対する忠誠を押し付けるが…”の部分である。“but they who love the greater love しかし、大いなる愛を愛する者たちは…”の部分からはあきらめが感じられ、絶望して終わる。最後に「彼らに永遠の休息を与えたまえ」とテノール

がつぶやいて終わる。しかし、永遠の休息を懇願しつつけても、休息は来ないのである。

第6章 リベラ・メ

4分の4拍子

低く弱く執拗に叩かれる打楽器に乗って、「リベラ・メ」とコーラスがかけあいに入り、不協和音の上に半音階で音量が増していく。「リベラ・メ」の最終音を次に引き継ぎながら進み、オーケストラが半音階で不安定に上昇していく。この「リベラ・メ」と唱えているのは、戦争の犠牲者となった亡くなった兵士たちなのだろうか。うごめきながら、地獄でつぶやいている。この緊張感に耐えられなくなったところ、神の鉄鎚が下る。打楽器群がディエス・イレの突撃ラッパを再現させる。人間が戦闘を続けるかぎり、“libera me 私を解放してください”と呼びかけ続けていても、神は許してくれない。許してくれなくても人間は許しを求め続ける。

テノールのソロで、“it seemed that out of battle I escaped 私は戦場を抜け出し…”とささやくように入る。“I said, here is no cause to mourn ここには嘆く理由はない”と呼びかけ、バリトンが“None, said the other, save the undone years そうだとも、破滅させた歳月を除いてはね”“The pity of war, the pity war distilled 戦争の憐れさ、戦争が蒸留した憐れさ”と答える。“The pity of war,”はブリテンがこの曲の楽譜の冒頭に記した部分である。ブリテンが最も伝えたかったメッセージがここにある。ここに会話している手足をもがれた二人には、もう憎しみはどこにも無い。そして、この曲の最も感動的な場面に入る。テノールとバリトンソロが“let us sleep now 一緒に眠ろう”と、お互い溶けあうように呼びかけあう。ここでこの曲は初めて安らぐ。敵も味方もなく、ただ、戦争の犠牲者としてお互いに慰めあいながら、静かに眠るだけなのである。鎮魂の鐘とともに、天上からは天使たちの合唱が聞こえてくる。静かにアーメンと唱えながら、最後に f a c ファラドと pppp でやっと解決する。

5. 演奏

1962年の『戦争レクイエム』初演から今日までの、主な演奏会を日時、場所、演奏者を含めてここに示す。

・1962年5月30日 初演 イギリス、コヴェントリー、聖マイケル大聖堂

指揮者 ベンジャミン・ブリテン

Sop. ヘザー・ハーパー (Heather Harper)

Ten. ピーター・ピアーズ (Peter Pears)

Bar. フィッシャー・ディスカウ (Fischer-Dieskau)

・1962年11月 ドイツ初演 ドイツ、ベルリン

指揮者 コリン・デイヴィス (Colin Davies)

・1963年1月 イギリス ロンドン

指揮者 ベンジャミン・ブリテン

Sop. ガリーナ・ヴィシネフスカヤ

(Galina Vishnevskaya)

Ten. ピーター・ピアーズ (Peter Pears)

Bar. フィッシャー・ディスカウ (Fischer-Dieskau)

・1963年7月 ニュージーランド ウェリントン

指揮者 ジョン・ホプキンス

Sop. アンジェラ・ショー (Angela Shaw)

Ten. ピーター・ベイリー (Peter Bailie)

Bar. グレアム・ゴートン (Graham Gorton)

・1964年1月 オランダ アムステルダム

Sop. ガリーナ・ヴィシネフスカヤ

(Galina Vishnevskaya)

Ten. ピーター・ピアーズ (Peter Pears)

Bar. フィッシャー・ディスカウ (Fischer-Dieskau)

・1965年2月 日本初演

指揮者 デイヴィッド・ウィルコックス

(David Wilcocks)

Sop. 伊藤京子

Ten. 中村健

Bar. 立川澄人

・1985年 日本 広島

指揮者 小澤征爾

・1998年 ロシア

指揮者 ロストロポーヴィチ (Mstislav Rostropovich) 小澤征爾

Sop. 森川栄子

Ten. Bar. 不明

・2008年3月23日 東京 墨田区

指揮者 高関健

Sop. 木下美穂子

Ten. 吉田浩之

Bar. 福島明也

・2012年5月30日 初演50周年記念 イギリス コ
ヴェントリー

指揮者 アンドリス・ネルソンズ (Andris Nelsons)

Sop. クリスティン・オポレイス (Kristine Opolais)

Ten. マーク・パドモア (Mark Padmore)

Bar. トマス・クアスソフ (Thomas Quasthoff)

前述のように、この曲はドイツ軍に爆撃破壊されたコヴェントリーの聖マイケル大聖堂の再建を祝す献堂式のために書かれた作品である。当初、ブリテンはドイツ、イギリス、ロシアのソリストを予定していた。しかし、ロシア側が予定されていた女性歌手の出国を認めなかったため、ソプラノは英国の歌手に変更になった。かつての敵国同士が、お互いに同じステージで演奏することは、平和の証であろう。フィッシャー・ディスカウは、演奏会で「奇妙な出会い」を歌いながら、感動のあまり落涙したほどである。「死んだ友人達、辛かった過去が心に呼び起こされた。」とディスカウは語っている。聴衆はどのように受け取ったのだろうか。大聖堂の再建、英国の復興を祝う曲を期待した者は、戦争の悲惨と犠牲者の弔うものであったことに、戸惑いながらも感動したであろう。

戦後、ヨーロッパにおいてソビエトを中心とする共産主義国と、アメリカを中心とする資本主義国の対立により、世界は二分されたが、この冷戦最中、1962年にはベルリンでもコリン・デイヴィスの指揮で演奏されている。ベルリンはヒトラーの根拠地であり、ドイツ降伏のシンボリックな都市であったのが、61年にベルリンの壁が築かれ、東西冷戦の最前線となっていた。最終曲「奇妙な出会い」では、イギリス兵士とドイツ兵士が傷つきながら一緒に眠ろうという内容であり、終戦、平和、戦争への反省を込めて、かつての敵国で演奏している。イギリスでの初演と間をおかず演奏したことにも意味がある。

1963年に行なわれたロンドンでの演奏では、初演で予定されていたソプラノのヴィシネフスカヤが初めて登場した。この演奏は録音され、5ヶ月で20万枚の売り上げとなった。聴衆の心を打った証拠である。また、この年には南半球初演として、ニュージ

ーランドで演奏されている。

1964年には、オランダで初演されている。多くのユダヤ人が犠牲となった場所である。

日本では、1965年にデイヴィッド・ウィルコックスの指揮で読売交響楽団が初演している。また、1985年には広島で小澤征爾の指揮で演奏されている。小澤は終戦後40年の区切りに広島での演奏を希望していた。原爆の犠牲者を弔うためである。また、小澤は1998年にはロシアで演奏している。このときは、チェリストのロストロポーヴィチが、当時のエリツィン大統領に直談判して実現したものである。1997年11月に当時の橋本龍太郎首相がエリツィン大統領とのクラスノヤルスク会談で、20世紀中に領土問題を解決することを目指すという合意がなされたことにロストロポーヴィチは感動し、エリツィン大統領に直談判して実現したものである。歌詞はロシア語に歌われたため、ロシア人聴衆のすすり泣く声が、指揮をしている小澤征爾に聞こえたほどであった。

さらに日本では、2008年、東京大空襲のあった3月に、被害の大きかった墨田区で演奏されている。戦争の被害者は兵士達だけではなく、一般の人々も巻き込まれる。空襲の中で、逃げ場を失った人々が火に焼かれていく姿をまざまざと感じさせてくれる。だからこそ、この曲は演奏者、演奏日時、場所が意味を持つ、社会性の大きい曲なのである。

筆者は、2012年5月30日に、初演50周年の記念に、聖マイケル大聖堂で行なわれたネルソンズ指揮の演奏会をTVで視聴する機会を持ったが、いかに時、場所が重要な曲であるかを実感した。高く神々しい教会の窓から、スタンドグラスを通して光がそそがれている。そのなかを少年・少女達の天使のような歌声で安らかに囁かれるレクイエムの歌詞に、歌うというより、むしろ投げつけるようなオウエンの激しい怒りが垂直に突き刺さる。その異質な響きに耳を疑い、言葉を失う。戦争を止められなかった信仰。ただ、音楽を聞くだけでも心を揺さぶられるが、厳かで包み込まれるような光の中で、その光を糾弾するようなオウエンの叫びを聞いて、英語が母国語ならば、どれほど衝撃を受けるのだろうかと思う。思わず涙がこぼれそうになる。音楽と周囲の環境が一体化したときには、驚くほど五感に直接的に

訴えてくるのである。

6. 結論

ブリテンの『戦争レクイエム』は、死者の魂の安静を願うというより、むしろ、意図的に反戦を表しているものである。彼は徹底した反戦主義者として、生涯を貫いた。社会的弱者に目を向け、当時の社会常識に音楽を通して疑問を突きつけた。

彼は中産階級出身で、英国の激しい階層差別からは無縁であったが、本来、優しく繊細な性格であり、暴力への嫌悪感が強かった。社会的暴力、肉体的暴力、言語による暴力など、あらゆる暴力に対して拒否を示し、特に戦争に対しては耐え難い拒否感を示した。戦争忌避の渡米の結果、人々から非難を受けている。また、彼は同性愛者ゆえに、当時の社会から疎外されることも多かった。

1936年に作曲された『シンフォニア・ダ・レクイエム』の第1曲「涙の日」では、明らかにティンパニの響きは爆撃音である。両親の魂の安らぎを求めるだけではなく、既に『戦争レクイエム』と共通する不穏な響きに満ちている。彼は、この曲を出来る限り戦争反対ということで作ったと述べ、また、この曲を書いたことにより、より戦争反対の信念が強まったとも言っている。オーケストラ作品であり歌詞は持たないが、音自体が焦燥感を持ち、戦争の恐怖と言い知れぬ不安感をもたらす。

『戦争レクイエム』は、『シンフォニア・ダ・レクイエム』のテーマを、さらに追及したものである。第一次大戦の惨状を詩によって伝え、後世に警告したオウエンの詩を取り入れることにより、よりメッセージがはっきりとした。1962年に第二次大戦の惨状を、音楽とオウエンの詩を結合させることにより表現し、警告したのである。さらに、演奏のあり方自体にも、同様のメッセージが込められている。楽曲と演奏の両方に反戦のメッセージが託されている点に、『戦争レクイエム』の普遍性があると言えよう。

参考資料

(楽譜)

Britten, Benjamin. *War Requiem Op66.Full Orchestral Score*. London: Boosey & Hawkes, 1962.

(文献)

Carpenter, Humphrey. *Benjamin Britten: A Biography*. London: Faber and Faber, 1993.

Tackett, Justin. "Dona Nobis Pacem: The Ironic Message of Peace in Britten's War Requiem." *College Undergraduate Research Electronic Journal* (2006) <http://repository.upenn.edu/curej/72>

オウエン、ウィルフレッド 佐藤芳子訳、『ウィルフレッド・オウエン戦争詩篇 第1巻』近代文芸社 1993年

(ウェブサイト)

Howard, Dick. "Our History."

<http://www.coventrycathedral.org.uk/about-us/our-history.php.2012.4.202>.

(Received:September 30,2012)

(Issued in internet Edition:November 1,2012)